

はしがき

第一章 ユニオン・ジャック再び

老虎と若獅子

現地住民への示威

ラングーン会談

作業隊供出のいきさつ

第二章 シンガポール作業隊

広場の土下座

クルアンの関所

タンクリン

犬や馬なみ

第三章 マレー作業隊

植民地体制下に安住

南馬軍指令所へ

ドラム缶の運搬競走

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

六

八

八

三

六

三

三

三

四

四

五

五

七

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

……

七

八

九

九

一〇

一〇

一三

一六

一五

一五

一七

一七

一七

一四

一五

一五

一五

第五章 十万人の残留

英軍、方針を変更

売られる日本人

内遷終期を明示せず

盛んな「出稼ぎ」

エンダウの山に赤旗

「文」の二道へ

罨と密偵
俺の今の気持ち(作業隊員の手記)

第六章 皿の乾いた河童

重たい商標	……一七〇
ビールで買収	……一七〇
日本の民主主義	……一七四
「対立」の民主主義	……一八二
新憲法と軍隊	……一九〇
人間信仰	……一九五
生きる自然	……二〇〇
リンゴの歌	……二〇六
西欧思想の勝利	……二一七
復員	……二二〇
あとがき	……二三三

マレー捕虜記

マレー捕虜記

はしがき

炎天に魂抜けしたる兵達のあはれなりけり玉の汗落つ

(クルアン K生)

溝を穿つ友見下して腕くめる白人の兵何を思ふや

(南三通 田中武二)

いづれをかあはれといふや歟ふれる素裸の友を見ている白人

(南三通 田中武二)

苦しきは作業強ひられ兵を呼びて新たに指示を吾が下すとき

(クルアン栗林隊 澄谷生)

さりげなき様はよそへど口笛に呼ばるる時し屈辱(はぢ)を噛みいる

(セレンパン 深山重好)

内還の話も絶へて今日も又作業に出づる友ら黙して

(内還とは内地帰還の略語)

(セレンパン 深山重好)

これらの歌は終戦後、マレーで英軍の強制労働に服した人々(作業隊と呼ばれた)がよんだものである(馬來南部部隊の陣中新聞「東京ニュース」所載)。シベリヤの強制労働は広く伝えられたが、南方のそれは一般にはほとんど知られず、いくつかの戦友会誌の中に埋没したままである。そこには敵寒はないが、酷熱の陽光のもとに悪疫のはびこる地、労役の苦痛は北方に劣るものではない。私自身も南方に抑留された一人で、作業隊には属さなかったが、毎日、作業隊と接触していたので、その実態は知っている。真つ黒に日焼けし、あばら骨の浮き出た兵たちが、半ズボン一つで黙々と道路工事や自動車修理、農耕などに従事する姿がまぶたに残っている。これはやはり語り伝えておかねばなるまい。本書はマレー、シンガポールの作業隊に代表される敗戦後の南方軍の姿を、自分の狭小な体験をまじえながら書き綴ったものである。